

土車

世阿弥作

季は	地は	狂言	子方	シテ	ワキ
雜	信濃	里人	若君	乳父小次郎	深草少將

「夢の世なれば驚きて。く。捨つるや現なるらん。

詞
かやうに候ふ者は。深草の少将がなれる果にて候。

我妻におくれ。浮世あぢきなくなり行き候ふ程に。
一子を捨てかやうの姿となりて候。我世に在りし時より。善光寺への望みにて。此程は信濃の国に候ふが。今日もまた御堂へ参らばやと思ひ候。

シテ一声
「如何にあれなる道行き人。善光寺への道教へてたべ。なに物狂ひとや。よしさ思し召されんに付き

ては。猶御情は有明の。つれなくも御通り候ふものかな。

詞
「是に御入り候ふは主君にて御座候ふが。父を失ひ彼方此方を御尋ね候。是を憐みてたび給へ。あら笑止や又むつかり候ふよ。いやくさやうに心弱くむつかり候はゞ。今日よりしては御供申すまじく候。

子詞
「如何に乳父。今日よりしては泣くまじいぞとよ。

シテ

「あらいとほしや。さあらば何処までも御供申し。

父御に逢はせ参らせ候ふべし。痛はしやいにしへは。鸞輿属車に召されし御身の。名も高かりし日月も。地に遠近の土の車。引きかへしたる有様かな。諸仏念衆生。衆生不念佛。

シテ、子次第

「住まで世に経る土車。く。めぐるや雨の浮雲。

地「住まで世に経る土車。く。めぐるや雨の浮雲。

子サシ「是は都の辺り深草の者にて候ふが。思ひの外に父

を失ひ。諸国をめぐり候ふなり。

シテ「悲しきかなや生死無常の世の習ひ。一人に限りたる事はなけれども。

二人「悲しみの母は空しくなり。残る父さへ幾程なく。思ひの家を出で給へば。其行き方をも白雪の。跡を尋ねて迷ふなり。

シテ

「あはれや実にいにしへは。花鳥酒宴にまどはされ。春秋を送り迎へし御身の。かくあさましくなりぬ

れば。僅なる露の命を残さんと。

下歌
「念佛申し鼓を打ち。

地
「袖をひろげ物を乞ふ。

上歌
「心を人の憐まば。く。尋ぬる父の行方を。教へてたばせ給へと。問へばはかなき憂き身ぞと。思ひながらも憂き旅を。信濃の国に聞こえたる。善光寺にも着きにけり。く。

狂言
「如何に是なる狂人。面白う狂ひ候へ。

シテ
「いや今は狂ひたうもなく候。

狂言
「御身はすねたる事を申す物かな。物狂ひなれば狂へと申す。唯狂うて見せ候へ。

シテ
「いやく狂ひ候ふまじ。

狂言
「さては狂ふまじきか。近頃にくき事を申すものかな。狂ふまじきならば。此如来堂には叶ふまじきぞ。急いで出で候へ。いやく御堂ばかりは曲もなく候。此国には叶ふまじ。此国ばかりは猶も狭

く候。総じて天下に叶ふまじきとよ。

シテ「何と天が下に叶ふまじきと候ふや。恐れながら御

事の身として。天が下に叶ふまじとは思ひもよらぬ仰せかな。往昔天智天皇の御宇かとよ。千方百と云ひし逆臣ありしが。其身も勢ひ有りし上。四つの鬼を使ひしかば。攻むべき様もなかりしに。藤原の朝臣一首の歌を書き。鬼の城に遣はす其歌に。土も木も我大君の国なれば。何処か鬼の宿と定めん。

地「此歌の理に。く。鬼もめでゝ去りぬれば。千方百も亡び候ひて。一天四海波を。打ち治め給へば。國も動かぬ荒金の。土の車の我等まで。道せばからぬ大君の。御影の国なるをば。一人せかせ給ふか。

シテ「殊更当国信濃路や。

地「木曾の棧かけて實に。頼みも危からぬ。法の声立

てゝ猶。

諸人の憐み他の力。洩らさじ物を弥陀仏

の。御影も普く。憐ませ給へ人々。憐みの中にも。

此御仏ぞ上なき。仏は衆生を。一子と思し召さる

れば。殊更我等が。影頼み頼む中にも。弥陀は母

にてましませば。父にも逢はせて。たばせ給へ南

無阿弥陀。

シテ「阿弥陀仏。」

地「阿弥陀仏。歌舞の菩薩声々に。花の振鼓。簞篋笙

の笛和琴。声をあげて叫べども。父とも答へず。

哀とだにも知らざれば。よしそれまでぞ。さゝら

も八撥をも。打捨てゝ狂はじ。皆打ち捨てゝ狂は

じ。

ワキ詞

「不思議の事の候。是なる物狂を如何なる者ぞと思ひて候へば。故郷に留め置きたる一子にて候。又此方なるは乳父の小次郎にて候。あら不便と衰へて候ふや。やがて名乗つて悦ばせばやと思ひ候。

や。あら何ともなや。一度思ひ切りたる道に。又輪廻の心の出で来て候ふは如何に。今逢ひ見たらば終の別れ。今逢ひ見ずは終の悦び。誠に三界の絆を。

地「こゝにて切ると思ひなし。南無阿弥陀仏と称へて。さらぬやうにて行き過ぐる。く。

シテ詞「いかに申し候。是まで父御をば尋ね参らせて候へども。父御に似たる人さへ御座なく候。さて何と仕り候ふべき。

子詞「今は命も惜しからず。前なる川に身を投げ空しくならばやと思ひ候。

シテ「實にくけなげにも仰せ候ふものかな。さらば御供申し身を投げ候ふべし。さりとも善光寺にては尋ね逢ひ参らせうずると存じ候へども。今は早某も退屈仕りて候。今宵は如來の御前にて。御心静かに念佛を御申し候へ。明けなば川へ御供申し候

ふべし。

地クリ
「それ生死輪廻の根元を尋ぬるに。有相執着の妄念より起れり。

シテサシ
「己れと心に迷うて流転無窮にして。

地
「車の庭に廻るが如し。昇沈不定にしては。鳥の林に遊ぶに異ならず。

シテ
「悲しきかなや我等今。人界に生を受くとは云ひながら。

地
「見仏聞法の結縁をもなさざれば。未來の楽しみも。いかゞと思ひ知られたり。

クセ
「凡そ弥陀の悲願には。破戒闡提をも洩らさず。一念十念の間に。彼國に迎へ取るべしと。五劫思惟の本願なり。

シテ
「さればにや其心。

地
「極重惡人無他方便。唯称弥陀得生極樂と。説かせ給へる。此理に任せつゝ。我等を助けおはしま

シテ詞
せ。く。

「思ひ切りたる事なれば。二人は手に手を取りかはし。川の辺に立ち出づる。

ワキ詞
「思ひ切りたる事なれども。又引きかへす心地して。門前さして追うて行く。

シテ
「すは早川も近づきぬと。二人は西にうち向ひ。既に憂き身を投げんとす。

ワキ
「あゝ暫しとて引き留まる。

シテ
「有りて憂ければ捨つる身を。留め給ふは中々に。我等が為めには憂き人なり。

ワキ
「今は何をか包むべき。是こそ父の少将よ。

シテ
「更に誠と白雪の。故郷の名は。

ワキ
「深草の。

地
「葉末の露の消えもせで。命のあれば又父に。逢ふこそ嬉しかりけれ。逢ふ事の。もし夢ならばいかにせん。現になり行かば。またもや父に別れなん。

地
「ともに命のながらへて。又廻り逢ふ小車の。別れ
し時の憂き思ひ。今逢ふ事のうれしさを。何にた
とへん方も渚の波。夜昼恋ひし我父に。逢ふこそ
うれしかりけれ。く。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第四輯」大和田建樹著